

<実践報告>

総合的な学習の時間における地域メーリングリストの活用

福島健介 東京都八王子市立柏木小学校

東原義訓 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Utilization of a Local Mailing List for the "Period for Integrated Study" in the Classroom

HUKUSIMA Kensuke:Kasiwagi Elementary School,Hachioji-City

HIGASHIBARA Yoshinori:Center for Educational Research and Training,Shinshu University

Kashiwagi Elementary School conducted classes focused on a local community in the "Period for Integrated Study". At the classes, students used the local mailing list, named 'Tama Manabi', run by local citizen as one means which deepens the learning of them. Over four hundred e-mails were exchanged on the mailing list and the e-mails extremely affected the students.

Also, through these processes, students were able to tell their approaches of learning to the local people. This paper reports the practical utilization of the mailing list in the classroom.

Moreover the role and the outcome of utilization of the local mailing list in the classroom was discussed.

【キーワード】 メーリングリスト インターネット 総合的な学習の時間 地域

1. はじめに

「総合的な学習の時間」のテーマとして、柏木小学校5年生は一昨年度から「南大沢98」という、地域を取り上げた学習を進めてきた。本校では、校内ネットワークに対応した学習用グループウェアソフト「スタディノート」を利用している。個人やグループの調査の成果を交流し、ネットワーク上で疑問や意見を出し合う中で、調べた中では気付かなかった考え方や、新しいテーマが生まれるなどの成果を得ることができた。6年生となった昨年度は、継続して地域を題材とした総合的な学習に取り組み、より深くテーマを追究することを目指した。

昨年度、本校にインターネットが導入されコンピュータを利用した学習を進める環境が整備された。同時に「スタディノート」もインターネットに対応し、e-mail送受信機能が加わった。地域を題材とした総合的な学習を進める上でも、インターネットの活用は子ども達がより深くテーマを追究するための方策として利用できると考え

た。

柏木小がある八王子市南大沢地区は多摩ニュータウンの西側に属し、情報インフラの整備が比較的進んでいる。また、NPOの活動など住民参加意識の比較的強い地域でもある。こうした環境を利用し、地域の人々の教育力を学習に取り入れ、5年生での学習の成果を発展させる方策として、昨年度はメーリングリストを活用した総合的な学習の時間「南大沢21プラン」に取り組んだ。

本稿では、地域の教育力を子ども達の学習に役立てるためのメーリングリストについて、授業での役割・運用方法と成果について実践報告をする。

2. 子どものためのメーリングリスト

メーリングリストを活用した実践はスタディノート上でもいくつか行われている。全国の小学生を対象とした「総合学習」メーリングリスト、つくば市の並木小学校・竹園東小学校の2校で実践された「花室川プロジェクト」などでは共同学習の手段としてメーリングリストが利用されている。これらの実践はいずれも小学生同士を構成メンバーとするメーリングリストを活用したものである。

また、「こねっとチュータ」等、全国的な規模で大人と小学生を構成員としたメーリングリストも運用がされ、経験が蓄積されている。

しかし地域を題材とした学習を進める上で必要な情報を得るためには、学校と地域を結び、構成メンバーとして地域の大人と子どもが直接対話をするメーリングリストが求められる。南大沢地域では昨年度「多摩まなび」というメーリングリストが創立された。その主な特徴は、総合的な学習の時間を地域から支援する、という目的を掲げていること、参加者がその目的を了解した南大沢地域の住民であること、等である。柏木小はこのメーリングリストに参加し、実践研究を進めた。

3. スタディノート

メーリングリストを利用するために、本実践ではスタディノートを用いた。なぜなら、子どもがメーリングリストに参加するために適した以下のような特長を有しているからである。

①メール送受信機能

子どもが操作することを前提に開発されたメール機能を有し、校内でのメールも校外とやりとりするメールも同じ操作で扱うことができる。本校では既にスタディノートを用いて、校内ネットワークを利用したメール送受信について体験している。

②「掲示板」機能

スタディノートではメーリングリストへの送受信は共通の「掲示板」という機能で実現される。子どもの意識としては、掲示板にメールを送信し、返事も掲示板に返ってくるという感覚で接することができる。このため、メーリングリストについて意識することなく利用することができる。この掲示板はどの子どもも読むことのできるた

目的

地域の学校（小・中）の「総合的な学習の時間」を支援し、学校と地域の協同のまなびを実現する

運営方針

①具体的な活動としてメーリングリストを活用する。

②学校は、メーリングリストを通して子どものまなびのようすを発信する。そのことを通して「地域に開かれた学校」を目指す。また参加者との交流を通して、地域の教育力を学校に取り入れることを目指す。

③参加者はメーリングリストを通して子どものまなびを支援する。また、子どもの保護者ではなく地域住民として学校、教育について知り、話し合う機会とする。

参加者

南大沢地域の学校の学習を支援するという趣旨に賛同する方なら、参加資格問わない。

ただし、メーリングリストを具体的な活動とするため、アドレスの保持が実質的な参加資格となる。「多摩まなび」に参加を申し込んだ時点でメーリングリストにも登録される。

学校は、学校としての参加、教職員個人の参加のいずれも可能とする。

活動

メーリングリストを日常的に運用するために、参加者の投稿内容については特に限定しない。連絡・情報・意見・疑問等参加者同士が対話できる場として活用する。また、3ヶ月に一回程度、参加学校で会合を開き、学校・参加者が意見交換できる機会を作る

図1 メーリングリスト「多摩まなび」の概要

資料が午前中に届いていたのにはびっくりしました。

さっそくコピーして、公園グループに渡しました。

ありがとうございました。

その中の一人がつぶやいていたこと。

「私たちと同じことしてる大人がいるんだね」

「それは違う、お前達が大人と同じことをしてるんだあ」

図2 教師の投稿例

多摩まなびのみなさんへ南大沢21プランのスーパーコンビニ班です。

こじま あきみさん先日は、メールありがとうございます。

ボク達は、あれから平成8年事業所 企業統計調査をインター ネットや図書館で調べました。

その結果南大沢図書館にリクエストしました。

インターネットでは、この資料を見るのに¥40000懸かります。

そして、この資料をお持ちの方がいたら見せていただけませんか。

よろしくお願いします。

図3 資料についての子どもの調査報告と再依頼（児童→参加者）

ぼくたちがこのテーマを選んだ理由は、

家の前などでよく宅配便の車を見かけたり、

*「どうして宅配便をテーマに選んだのか」という参加者の質問に答えた子どものメールの一部（筆者注）

図4 参加者からの質問への回答（児童→参加者）

はじめまして、こんにちは。

私たちは、柏木小学校の6年生で、今、学校の勉強で、南大沢の公園について調べている、公園班の、2班です。

先日、公園1班に来た、メールを、読ませていただきました。

私たちは、南大沢の、4つの公園しか、調べていないのですが、鎌田さんの、情報も参考・・・（または資料）に

したので、情報を提供していただけますか？

もし、良ければ、メールで、送ってください。

メールをいただいて、私たちの、調査結果がまとも次第、鎌田さんのほうに、お送りしますので、情報を、提供していただけませんか？よろしく願いいたします。

図5 自分たちと同じテーマで調査をした参加者へのメール（児童→参加者）

め、情報の共有化という面でも効果がある。

③アドレス振り分け機能

学校では通常子ども一人一人がメールアドレスを持つことはなく、学校のメールアドレスで外部とのメール送受信を行うことが多い。スタディノートは一つのアドレス

を利用して外部とのメール送受信を行うが、送信者欄には利用した個人名が自動的に書かれる。また受信についてはサブジェクトに書かれた個人名を判別して、外部からのメールを自動的に個人宛に振り分ける機能を有する。子ども達はどのマシンからでも個人宛のメールを読むことができる。

④メールゲートウェイ機能

子ども達のメールは趣旨が分かりにくかったり、表現が適切でない場合がある。また、有害な情報が送信されてくることもある。こうしたメールの送受信を制御する機能を有している。この機能によって、教師の判断によりメールの削除を含む処置が可能となっている。

4. メーリングリスト利用の指針

4.1 メーリングリスト参加者への依頼事項

メーリングリストを利用するに当たっては、教師が事前に子ども達の学習のようすやメーリングリスト活用の趣旨、得られた情報の活用方法などを参加者に連絡する必要がある。学習の到達点や背景を知らなければ、参加者が適切な回答を寄せることができないからである。その際以下のような点に留意する。

(1) 技能面での依頼事項

- ①漢字、外国語については参加する学年の実態に合わせた利用をお願いする。また添付ファイルの利用は避けてもらう。
- ②子どものメールは改行、引用、署名等通常の e-mail では常識的な了解事項から外れる場合もあることを事前に連絡しておく。
- ③サブジェクトに” re” は避け、誰に対する回答なのかを明示してもらう。
- ④家庭でのメール送受信とは異なり、PCを利用できる時間が限られるため、反応が遅くなる点を了解してもらう。

(2) 学習に関わる依頼事項

- ①アンケートの回答など共有する必要のない情報は個人（グループ）宛メールとして返信をお願いする。
- ②質問や疑問に対する回答とともに、回答者の側からも意見や疑問、学習に対する発展的な発言を返し、継続的な対話を意識的に引き出してもらう。
- ③メーリングリストの趣旨を生かし、参加者の回答も含め、どの発言に対してもレスポンスを行う。その際、子どもが読むことには配慮をしてもらう。

4.2 子どもに対する指導

子どもにとってメーリングリストは自分たちのまなびについて情報を得たり、質問をしたりする場となる。前記のようにスタディノート上ではメーリングリストというシステムそのものを理解することは必要ではない。指導する点としては以下のようなことが挙げられる。

表1 「南大沢21プラン」授業経過

| 月 日 | 時 | 児童の活動 | 教師の支援 | 外部との調整、連絡 |
|--------|---|--|--|----------------------|
| 6月10日 | 1 | 昨年のまとめを見る | 南大沢はどんな街なのか友達の調査結果をよく見させる | |
| 14日 | 1 | 2010年の南大沢はどのような街になっているか予想をたてる | こういう街にしたいという願いも含めて考えさせる | |
| 15日 | 1 | 昨年の自分のテーマについて、予想される考えをコンピュータに入力 | 友達に自分の考えをわかりやすく伝える文章で書かせる | |
| 16日 | 1 | 昨年のグループで集まり、昨年調べたテーマを免服させ、年の南大沢についての新テーマ・研究内容をまとめ、コンピュータに入力 | 自分の考えをお互いに出し合い新テーマ設定に意欲的に取り組ませる・読む人が読みやすく、新テーマ決定の参考になるように、わかりやすくまとめさせる | |
| 17日 | 1 | | | |
| 23日 | 1 | データベースを見て今年のテーマを考える | 自分の研究してみたいものは何かじっくり考えさせる | |
| 25日 | 1 | 今年のテーマを決める | 調査結果を知らせ、変更も可能にする | |
| 7月3日 | 1 | 研究グループの決定 | | |
| 19日 | 1 | 研究計画作り(テーマ、予想、調査方法) 夏休みの調査活動の相談 | どんな調査方法があるか、アドバイスをする 夏休みにしかできない調査は何かを考えさせる | |
| 夏休み | | 調査活動(校内) ・インターネット・図書館 調査活動(校外) ・実地調査・図書館 ・関係機関へ訪問 ・街頭アンケート・実験 | ・調査方法のアドバイス ・調査活動の方向づけ | 訪問先への依頼書作り訪問先へ連絡 |
| 9月4日 | 1 | 夏休みの調査報告 | 夏休みに取り組んだことを振り返り、今後の活動の見通しを持たせる | |
| 18日 | 1 | 今後の活動計画作り | 必要な調査は何か考えさせ、研究の方向性をアドバイスする | |
| 10月7日 | 2 | 調査活動(校外)とまとめ | 結果をわかりやすくまとめさせる | 訪問先への依頼書作り |
| 12日 | 2 | 調査活動(校外)とまとめ | 結果をわかりやすくまとめさせる | 訪問先への依頼書作り |
| 16日 | 1 | 家の人へ質問・アンケートなど(授業参観の活用) | この機会を大いに利用して積極的に質問したり、アンケートを取らせる | |
| 19日 | 1 | 市役所の人への質問を考える | 自分たちのテーマで、どんなことを質問したいか、じっくり考えさせる ・質問内容を相手にわかりやすくまとめさせる | ・市役所へ講師依頼・担当者との打ち合わせ |
| 26日 | 1 | 市役所の人への質問を考える | | |
| 27日 | 2 | 市役所の人への話を聞く 市役所の人へ質問をする | 市役所の人話を聞き、活動や考え・願いを知り、積極的に自分たちの研究に生かすようにさせる | 市役所へお礼状発送 |
| 30日 | 1 | これからの活動を考える | 今までの調査を基にこれからやるべきことを考えさせる | |
| 11月30日 | 1 | メーリングリストに出す質問を考える | 自分たちのテーマで、どんなことを質問したいか、じっくり考えさせる | |
| 12月2日 | 2 | メーリングリストに質問を送る | 質問内容を相手にわかりやすくまとめさせる | |
| 6日 | 1 | 実地調査の計画を立てる | 今までの調査を基にこれからやるべきことを考えさせる | |
| 9日 | | 質問の回答を見る | 回答を見せアドバイスを与える | |

(1)技能面での指導

- ①言葉使い、適切な改行、署名などメールとしての最低限のルールについての指導。前記のメールゲートウェイ機能を利用し、書き直しを指導することもある。
- ②受け取ったメールやメーリングリスト上の投稿について、必要に応じて印刷したり、自分の作品に取り入れるための技能の指導を行う。
- ③投稿数は一日平均10通前後あり、1週間に一度程度のPC利用では投稿を読むだけで1時間の授業が終了してしまうこともある。休み時間・放課後等、自主的にPCを使いメールを読む習慣を身につけさせる。

(2)学習に関わる指導

- ①投稿の中から、自分に関わる必要な情報を見つけだし、整理するための指導が必要である。(情報を活用する力)
- ②サブジェクトだけにとらわれず投稿内容を一通り読み、役立ちそうな投稿には積極

的に関わる姿勢をとるように指導する。(情報に関わろうとする態度)

4.3 運用上の留意事項

- ①日常的にゲートウェイを管理し、誰に対してどのような投稿がされているか、関連する投稿・他のグループにも参考とさせたい事項はないか等メーリングリストの投稿内容を把握し、子どもの支援に備える。
- ②教師が学習支援の目的で投稿する内容や連絡事項などは子どもにとって不要なものであり、メールゲートウェイで削除する。
- ③投稿は、教師の側では全て印刷をしておき、PCを利用しなくても子どもに対して支援ができる環境を整えておく。
- ④教師は、適宜メーリングリストに投稿し、特に回答に対する子ども達の反応などを報告する。子どもの実態に応じた投稿の依頼など、きめ細かな配慮が必要な場合もある。

5. 実践の経過

授業実践は99年度柏木小6年生3クラスで行った。メーリングリスト活用に至るまでの経過を表1から示す。

5.1 メーリングリスト利用の目的

一学期には、昨年の取り組みを振り返りながら新しいテーマを決め、夏休みにアンケート調査など実地調査に取り組んだ。

二学期は教師のアドバイスを受けながら再度調査計画を作成した。計画に基づいて二度実地調査を行い、また保護者・市役所職員との話し合いの時間を設定した。

取り組みが進むにつれ、子どもの中に「自分のテーマについての調査は終わった」という意識が強くなり、教師の支援が入りにくくなってきた(10月末)。それは次のような理由ではないかと考える。

第一に、自分が考え調査方法も決める総合的な学習の時間では、調査活動に力を注いだ子ども達に充足感があり、その分、教師のアドバイスに基づく調査活動に意欲が出ない実態がある。

第二に、活動した子ども自身ではそれまでの調査結果やその解釈が十分なものかどうか、別の考え方や調べ方はないか等を客観的に評価しにくい。

一方教師の側では、子どもの調査結果やその解釈について不十分さを感じ、子どもの意識との間でずれが生まれてきていた。この状況を打開する手段として今回メーリングリスト活用を授業に導入した。

ねらいとしたところは三点ある。

- ①アンケート調査など、意見を求める範囲を広げデータを確かなものにしていく
- ②子どもの調査や、考察に対する意見を求め評価・アドバイスをしてもらう
- ③上記の活動を通して、自分たちの取り組みへの自信、意欲を高める

炭谷さんへ
 ポンボコの5713のメールを読みました。
 僕達の調べている道、坂、階段と関係ありそうです。
 ぼく達には、難しいのもっとわかりやすくして
 もう一度多摩まなびに送って下さい。お願いします。
 特に「歩車分離」と「歩車共存」いうことについて教えて下さい。
 道、坂、階段1

*別テーマのグループと参加者のやりとりを読んで、自分たちの調査とも関係がありそうだと気付いたグループの投稿

図6 他グループに対する回答を読んだの児童のメール（児童→参加者）

南大沢では今でも、たとえば新宿なんかとくらべて、段違いに便利だと思います。
 その他、坂とは直接は関係ないことで、一般的なことだけ：
 ◆ 自動改札の幅を広げる
 ◆ 広いエレベーターが必要（フレスコやパオレ内のエレベーターは狭いと思う、広いエレベーターは値段が高いし、電気代とか維持費もたくさんかかる、だいたい場所をたくさんとってしまうけれど）
 ◆ お店の通路やレストラン内、トイレでは、電動車椅子が回転できる余裕があること
 ◆ 券売機は低い所にもあるといい
 ◆ 公園などジャリを敷かない
 まだまだあると思います。実際に車椅子に座って、押しもらって動き回って下さい。とてもよくわかると思います。上にわたしが並べたこともほんとにそうかな、って思っただけでいい。（もう、やってるかな。）
 最後に少し。
 坂、階段と車椅子移動の利便のことを考えるってことは、道や、人々の生活行動、まちづくり全体を考えるということだと思います。どんな町にしたいか、というみんなの考えがあって、そこから出発するのだと思います。どんな道がどのように通っているのが良いのか、住宅はどのようにあるのがいいのか、毎日の生活で人はどこからどこに行って何をするのか、といったようなこと。
 考えて、考えて！そして、話して！

図7 「街作りアンケート」についての回答と調査方法の提案（参加者→児童）

> 私達は、鈴木さんからメールをいただいた公園班1です。

久しぶりですね、、、

> 鈴木さんの紹介してくれたアドレスをみました。そこで
 > 質問したいんですけど、どうして公園の事をそんなに
 > くわしく調べたのですか？

公園にはたいへん興味があります。アドレスを紹介してるのは多くの皆さんに、、多摩ニュータウンにこれだけの公園があることを知って欲しいと思います。

<http://www.mars.dti.ne.jp/~nac/park/index.html>

>あと誰がアドレスの
 > 写真を撮ったり文章を書いたのですか？

名前は忘れましたが、ホームページにのせるときにメールを送っています。その時、たいへん勇気づけてくれるメールをもらいました。公園のホームページの感想などを先生の許可をもらって送ってみるといいと思います。

図8 参加者と子どものメールの交流事例

○みんな知っていますか？

南大沢の団地ができる前はこんな感じでした。

<http://www4.justnet.ne.jp/~bokujo-no-otusan/tera-panorama-time.htm>

これはおっさんの住んでいるところですが南大沢もこのようなところでした。
 多摩ニュータウンはあまりにも自然を作り変えたり、あるのは団地と公園、お店があるだけですな、、、
 もっと、、自然の山や畑、自然の川があってもいいと思っています。

図9 参加者が作成したWebの紹介

5.2 実践の様子

12月初旬から3月中旬までメーリングリストは活用された。冬休みをはさんで3ヶ月間の利用で、413通のメールが掲示板・個人でやりとりされ、直接参加した地

初めてお返事します。
 三瀬（みせ）です。
 期待に添（そ）える返事かどうか分かりませんが、参考になればと思います。

・・・児童のメール引用部分（筆者注）・・・
 >私達は11年後の南大沢の店の数について調べています。
 >そこでお聞きしたいのですが、この南大沢にはフレスコや
 >イトーヨーカドーのような大きなお店があります。
 >そこでこのような大きなお店ができる前に南大沢の地域の人達は、
 >どこで買い物をしていましたか？

 妻（柏木小1期卒業生）の話によると・・・。
 「南大沢の団地が建ち始めた16、7年前は、3丁目のスーパー三和が一番便利なスーパーでした。イトーヨーカドーはもちろん、三徳も無く、三和は今より品数も豊富だった気がします。堀ノ内にもまだスーパーが無かったので、週末には、よく多摩センターに買い物に行きました。といっても、電車が通っていなかったもので、バスですよ。（当時は多摩センター行きのバスがありました。）」

図10 柏木小学校第一回卒業生からの情報

この利便性を、子供たちはどう考えているのでしょうか。ここから、宅配便に対する問題意識が何かということが、わかります。

>でも、わずか2軒か3軒の夜の配達のためにわざわざトラックを走らせるのは社会のムダとも思います。

もっともです。これを、子供たちに議論させ、考えさせたいところです。

図11 参加者同士のメールの交流事例

域住民の数は42人となった。また、参加者の年齢層も小学生から60代までと幅広かった。男性からの返信が大部分を占めた点も特徴的であった。

当初、メーリングリストを利用するかどうかはグループの自由な選択に任せたため、最初から利用したのは31グループ中18グループだった。一回目の投稿はアンケートの依頼がほとんどであったが、丁寧で速い回答に投稿した子ども達から喜びの声があがった。この様子を見て、利用を考えていなかったグループもどんどん参加するようになってきた。子ども達の投稿内容もアンケートの依頼から、資料を尋ねたり参加者の考え方を尋ねたり（図3）と広がりを見せるようになってきた。

自分たちの調査について参考となるデータや人物を紹介してもらったグループは、再度実地調査を行い、その結果を報告して、励ましの言葉ももらった。逆に質問ももらったグループは、自分たちの調査の方法や意味をまとめ（図4）、回答を投稿した。

自分たちと全く同じテーマ「公園の利用状況」を調べた参加者に出会った子どもは「私たちと同じことをしている大人がいるんだね」と驚き、お互いの調査結果を交換する約束をした（図5）。

まとめ方についてアドバイスももらったグループは「先生、このまとめはインターネットで見られるようにしてくれるんでしょう？」と自分たちのまとめがどのように発表されるかを考えるようになってきた。さらに、他のグループの投稿に対する回答から新しい疑問を感じて、自分たちのテーマとは別に投稿をする（図6）子ども達も

出てくるようになった。

しかし一方で、大量の投稿や回答にとまどい、読むだけで精一杯となり内容を消化しきれなかったグループも生まれた。この点は、教師の支援のあり方を工夫しなければならない点であった。

5.3 特徴的なメールの事例

メーリングリストのメールに見られた特徴的な事例を以下に示す。

①子ども達の最初のメールは質問の羅列やアンケートだったが、参加者はアンケートに回答する際に、回答項目に付随して自分の考えを丁寧に述べる（図7）場合が大部分を占めた。資料を作ってくれたり、キーパーソンを紹介してくれたり、まとめ方について指導をしてくれたりするメールが多く、項目に回答するだけのメールはむしろ例外的な事例である。

②参加者と子どものグループで数回にわたってメールの往復が行われた。回数が増えるに従って子どものメールにも変化（5.2）が見られ、Q & Aからお互いの考えを尋ねる交流に質が変わっていった。

③インターネットの特質を活かし、Web上の資料について検索をかけて示してくれる参加者も複数いた。参加者から紹介されたWebページはメーリングリストの全活動を通して14種類（図8）、団体数は8団体であった。また、中には自分でWebページを作り、子どもに映像資料を提供してくれる事例（図9）もあった。

5.4 メーリングリストを通して生まれた活動

メーリングリストの活用を通して生まれた特徴的な活動事例を以下に示す。

①メーリングリストをきっかけとして、この後電話で意見を尋ねたり（2グループ）資料を送ってもらうグループ（7グループ）、直接参加者と会って話を聞いたグループ（2グループ）が生まれた。

②参加者のメールに刺激を受けて、子ども達は新たな疑問や調査方法を考え出した。教師の支援と連携して、子ども達のまなびへの指導・援助の役割を果たした。

③第一回卒業生が見つかったり（図10）、他校の小学生、近隣の小学校の校長先生が参加するなど、新しい出会いが生まれた。

④メーリングリストに投稿された子どものメールを読むことを通して、参加者同士がまなびのようす、教育について対話（図11）を始めた。事例としては、3グループ（植物・宅急便・街作り）の話題にとどまったが、学校と地域の新しい形の関わり方が生まれた。

⑤子ども達が今何をどのように学んでいるか、という途中経過を時系列にそって知らせることができた。

6. 考察

メーリングリストの活用を通して見出されたいくつかの可能性について仮説を提案

する。

- ①メーリングリストの利用で、子どもたちはより多くの人と交流することができる。また、普段接する機会の少ない人たちとの交流もできる。
- ②メーリングリストを通して、参加者は子どもの学習に対しての指導・助言をすることができる。
- ③メーリングリストでは、子どもの学習について参加者同士での対話が始まる可能性がある。
- ④メーリングリストを通して、学校のまなびの様子を経過を含めて地域に発信することができる。

7. まとめ

メーリングリストを利用したことで、普段子どもたちが接することの少ない地域の人と交流し、支援を受けながら地域学習を進めることができた。

メーリングリストには地域の教育力を学習の場に取り入れ、総合的な学習に関わる効果的な指導・援助をする役割を期待できる。

今回の実践では、子どもたちの調査活動がある程度進み、参加者に中間的な成果を示せる段階でメーリングリストを利用した。その結果、子どもと参加者の間で交流が進み、学習活動を活発にすることができた。学習活動のどの過程でメーリングリストを利用することが適切か、という点について示唆を得ることができた。

さらに、学習の支援にとどまらず、学校での学習の様子、子どもたちの考え方などを地域に伝えていく効果が生まれた点は、教師が予期しなかったメーリングリストの特長であった。

インターネットの学校利用のあり方として、今後もメーリングリストを活用していきたいと考える。

ただしそのためには、題材や学習課題に即した適切なメーリングリストが必要である。運営目的の検討、メールサーバ等ハードウェア設置に関する環境整備、子どもや学校の実態に合ったソフトウェアの導入、参加者の確保と運営方法の検討などが、地域や学校の特質に合わせて考えられなければならない。

参考文献

- 1) 佐伯 胖 (1997): 「新・コンピュータと教育」 岩波書店
- 2) 情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 (1997): 「体系的な情報教育の実施に向けて」 www.moubu.go.jp

(2000年3月31日 受付)